

「清光館哀史」

短期大学部 キャリアデザイン学科 渡辺 道斉 教授

東日本大震災から2年、死者・行方不明者1万8000人、今だに避難所生活を余儀なくされている方は32万人におよぶ。三陸海岸の報道を聞くたびに頭の隅に浮かんでくる文章がある。日本民俗学の祖といわれる柳田國男の「清光館哀史」である。高等学校の国語の教科書にも採録されている。

柳田がこの紀行文の舞台となる岩手県北部種市町の小さな漁村、小子内(おこない)の「旅人宿清光館」をたまたま訪れたのは、1920(大正9)年。前年に貴族院書記官長を退き、朝日新聞社の客員となった8月下旬のことである。その夜、旧盆の月夜の浜辺で女衆ばかりのあまりにも静かで淋しい盆踊りを見るのだが、踊りで歌われる単調な歌の意味が柳田には聴き取れなかった。6年後の1926(大正15)年7月末、旧知の郷土学者の追悼会が八戸であり、同伴した3人の子どもと足をのびし、再び「清光館」を訪ねるが宿主の海難事故死により旅館はなくなり、一家は離散したことを知る。

この時、たまたま村の若い娘から盆踊りの歌詞を聞き出し、男衆に一夜の癒しを呼びかける恋歌であると推論し、「…遺瀬無(やるせな)い生存の痛苦、どんなに働いてもなお迫って来る災厄、如何に愛しても忽(たちま)ち催す別離、斯(こ)ういう数限りも無い明朝の不安があればこそ…」、「痛みがあれば

こそバルサム(癒し)は世に存在する。」と、東北の小村に生きる常民への限らない共感を示す。

「清光館哀史」に心の恩を受けて人類学者の道に進んだ川田順造は、ある雑誌のなかで柳田のこの歌と盆踊りの解釈の誤りを指摘し、柳田の文人としての並外れた美意識の優越が民俗学者柳田の他者理解を妨げていると厳しく批評した。それでもいい、それでもなお、私にとり、この文章は美しい。

※原文は、<http://touhoku.sakura.ne.jp/00x-10-44yk-kikou-04.htm>にて閲覧可。

Profile

わたなべ みちなり
埼玉大学教養学部教養学科文化人類学コース卒。同年、名古屋鉄道(株)文化事業部博物館リトルワールド建設室に入職。市野学園短期大学生活文化学科講師を経て、同学科助教授。愛知県立大学国際文化研究科修士課程修了後、名古屋経済大学短期大学部キャリアデザイン学科にて文化人類学を担当。2007年よりキャリアデザイン学科教授。研究テーマは「労働観の比較研究」。日本文化人類学会、日本展示学会所属。博物館リトルワールド客員研究員。

